

# TOPPOS TOKIWA POST

## VOL. 30 SUMMER

### 常磐大学

■大学院  
■人間科学部 ■国際学部  
■コミュニティ振興学部

### 常磐短期大学

常磐大学高等学校  
常磐短期大学 附属幼稚園

[2003.6.30.]

発行/学校法人 常磐学園 ■編集/学園報編集室 水戸市見和1丁目430-1 電話 029 (232) 0007 http://www.tokiwa.ac.jp/

## 2004年、学科再編で2学部が進化!



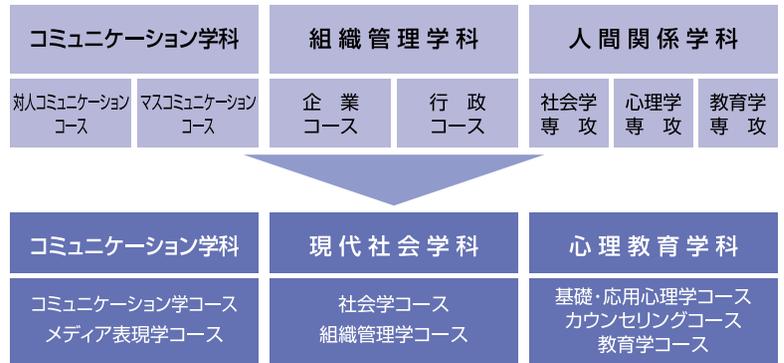
国際学部  
何を学び、何が身に付くのか。それをより明確にするのが国際学部の学科再編です。海外・地域に貢献し、大卒社会人として評価される人材の育成に取り組みます。

### 新しいタイプの国際人を育てる!



人間科学部  
新しくなる人間科学部には人間の本質を理解し、現代社会における人間関係を総合的に学ぶ環境が充実。社会の各分野で活躍できる人材を育成します。

### 人間の本质を理解するための科学!



国際学部は、実力ある社会人の育成をテーマに『国際関係学科』と『英米語学科』の二学科を設置する。現在の国際協力学科と国際ビジネス学科を統合する『国際関係学科』には、国際貢献や文化協力について学ぶ『国際協力学専攻』と、最新のビジネス状況をテーマに学ぶ『国際ビジネス学専攻』を設置。ビジネスについて実践的な知識を身につけたいという人、将来はNGOなど海外ボランティアで活躍したい人などに最適なカリキュラムを編成する予定だ。さらに、履修モデル的なコース制も採用し、『国際協力・交流コース』『公務・公的機関コース』『財務・会計コース』『企業・経営コース』『実践ビジネスコース』と、将来の希望進路に合わせて効果的に学ぶことができる。

人間科学部には、『心理学』『教育学』『現代社会学』『コミュニケーション心理学』が設置される。まず、現在の人間関係学専攻を、発展的に統合するのが『心理学専攻』。人間の心の働きを科学的に解明する『基礎・応用心理学コース』、カウンセラーに必要な知識とスキルを身につける『カウンセリングコース』、そして教育学の手法を用いて人間形成のメカニズムを探る『教育学コース』の三コースを設け、学生の興味や将来の進路に対応する。次に、人間関係学専攻・社会学専攻と組織管理学科を統合するのが『現代社会学科』。フィールドワークなどアクティブな学びが魅力の『社会学コース』、企業や政府などさまざまな組織の観点から人間についてアプローチする『組織管理学コース』の二コースからアプローチする。

また、英語教育を拡充し、従来の国際コミュニケーション科目をより充実した『英米語学科』では、聞く・話す・読む・書くという四つのスキルを磨き、「伝える」ための能力を高める。具体的な目標は『英検準一級』と『TOEFL550点』。入学時と二年生への進級時に「習熟度別クラス編成」を行い、効率の良いレベルアップを実現する考えだ。このように、新生・国際学部では、国際的な知識・感覚・表現力で、地域社会の発展にも寄与する人材育成を目指している。  
**Message** 学部長 黒羽 亮一  
「国際学部は、これまでの経験に基づいて学科編成を改め、国際社会でも地域社会でも重用されるような実力ある社会人の育成に、いっそう力を注ぎます。意欲のある学生ならば、人文社会、経済などそれぞれに得意な分野を持ち、かつ、教養ある大学卒社会人となつてはばいたいではないでしょうか。」

織管理学コースの二コースが設置され、「犯罪学」「被害者学」「経営学」「マーケティング」も学ぶことができる。そして、携帯電話、インターネットなど、さまざまな情報のカタチを探るのが『コミュニケーション心理学』。個人間の会話やマスコミなど、あらゆるコミュニケーションについて学ぶ『コミュニケーション心理学』と、WebデザインやCM制作など、クリエイティブな仕事に必要なスキルを学ぶ『メディア表現学コース』の二つのコースからアプローチする。  
**Message** 学部長 佐藤 守弘  
「混迷する現代社会の中で私たちはいかに生きていくべきかという根本的な課題を追究していくために、これまでの学科構成を再編成します。未来に希望をもち、真理を探究する意欲のある皆さんと共に学び、そして学園生活を共に楽しむことを期待しています。」

◎シリーズ30 シモツケソウ

### 夏の暑さを忘れさせる、高原の女王



六月から七月の野や山で、ふわっとした紅色の美しい花を付けるシモツケソウ。昔の下野(シモツケ)の国(現在の栃木県あたり)に、この花がたくさん咲いていたから名付けられたと言われることがあります。しかし、下野の国で最初に発見されたことから名付けられたのは落葉低木のシモツケ。そこで、シモツケに似た草」という意味で名付けられたのが、このシモツケソウだとする説もあります。確かに、鮮やかに野山を彩る赤い花はシモツケに似ており、素人目にはほとんど区別がつかないくらいです。この植物はバラ科の多年草で、高さはほぼ五十センチ以内。葉はカエデのように五分裂した鋸状をしており、ピンク色の散房状をした花は、直径四ミリから五ミリの小花でできています。また、つぼみは小さな赤い玉で、花が開くと花びらよりも長い雄しべが泡立つように広がります。涼しげな風情から「高原の女王」と呼ばれるこの花は本学の水生植物園で見ることが出来ます。夏の暑さを忘れる一時をシモツケソウを觀賞しながら過ごしてみたいかがでしょうか。

常磐の四季

◆金砂大祭礼

# 七十二年ぶりの大行列に参加

平安時代から受け継がれてきた荘厳な神事「金砂大祭礼」。この七十二年に一度という貴重なイベントを通し、学生たちは、さまざま  
な思いを心の中に刻んでいた。

**平** 安時代から受け継がれてきた七十二年に一度の神事、東西金砂神社の「第十七回磯出大祭礼(金砂大祭礼)」が三月二十二日から十日間の日程で行われた。

この金砂大祭礼は神霊が宿る「神体を御輿に乗せ、東金砂神社、西金砂神社の両神社から日立市水木町の水木浜まで渡御する神事。時代装束を身にまとった大行列が、まさに平安時代絵巻を繰り広げる。

本学で、この大行列への参加を呼びかけたのは人間科学部の柄澤行雄教授。昨年の秋にはフィールドワークの授業で金砂大祭礼をテーマに現地調査を行い、学生たちの関心を高めて参加者を募った。そして、その呼びかけに応え



↑時代装束を身にまとった行列は、まさに、平安絵巻そのものだ。  
→人間科学部社会学専攻・石崎亮さん(前列右) 人間科学部社会学専攻・鈴木亮祐さん(前列左) 人間科学部社会学専攻・西野浩之さん(後列右) 人間科学部社会学専攻・岩田陽功さん(後列左)

た約七十名の学生たちが、この一大イベントに加わることとなった。

学生たちが参加したのは東金砂神社の渡御大行列。大行列は約五百人で構成される大規模なもので、その全長は約一キロ。三月二十五日の出社から六泊七日の日程で行われ、通過する地域は東北五市町村にも及ぶ。一日のスケジュールもかなり厳しく、起床は平均すると午前五時。それから夜の八時頃までに、約十キロの道のりを歩く。履き慣れない足袋での山歩きは、非常に辛い。しかし、歴史的行事に参加することを得た経験は、学生たちを確かに成長させた。



御大行列に参加した西野浩之さんは、「大きくて歴史ある祭を実感することができました。行列では辛いこともたくさんありましたが、いく先々で見物客の人たちが温かく迎えてくれて、励まされながらやり遂げた感じがですね。これからは、この貴重な経験を踏まえて、古い文化や伝統を、日常の中でも大切にしていきたいです」と、感想を語った。また、神聖な神の木を担いだ石崎亮さんは「慣れない山歩きで足はもうパンパンに張ってました(笑)。印象に残っているのは、担いでいる大神の葉を取りに来たお年寄りに、自分が拝まれたこと。その様子を見てみると、とても軽い気持ちでは参加できない行事なんだと実感しました」と語った。そして親族の応援が嬉しかったと語るのは鈴木亮祐さん。「僕が参加することを知って、金砂大祭礼に関する新聞記事を全部スクラップしてくれたんです。『誇りに思う』とまで言ってくれて、本当に嬉しかったですね」と、この神事に参加する意味の重要性を実感していた。天下泰平旗を担いだ岩田陽功さんは「初日から悪天候に見舞われて、とても厳しかったです。みんなと一緒に頑張ったから励まし合いながら最後まで続けられたんだと思います」と、友だちとの絆を深めたようだ。延べ数百万人という見物客を集め、成功のうちに幕を閉じた金砂大祭礼。学生たちも、この一生忘れられない貴重な経験を通して、多くのことを学び取ったようだ。



## ◆金砂大祭礼とは…

東西金砂神社で行われる『磯出の神事』のことで、72年ごとに執行される大祭礼と、6年ごとに執行される小祭礼とがある。大祭礼の目的は、水木浜の清らかな潮水で御神体を清め、五穀豊穡を祈り、民心の安定と社会の平和を願うこと。第55代文徳天皇の仁寿元年(851)に始まり、前回行われたのは昭和6年。十二支を用いて制定されたので、大祭礼が行われるのは必ず未年にあたる。各地で田楽舞を奉奏し、この舞は、国選択・県指定無形民俗文化財ともなっている。



したのは、カスミ水戸見川店と上水戸店。六月の毎週土・日に学生たちが試験販売を行った。売り場に立った国際学部・国際ビジネス学科三年の柴田亜希子さんは「この販促計画は、すべて学生が主体となって推進してきました。まだまだ分からないことばかりで、プレゼンテーションの前日などは深夜まで準備に追われることもあったんですよ。でも企業の方たちとの共同作業を通して、普通の学生ではできないことをたくさん経験させていただいています」



**企** 業と学生の共同プロジェクトでマーケティングを実践する小川ゼミでは、現在「チーズかつお」プロジェクトが進行している。石原水産が製造するおつまみをより魅力的に改良するため、商品開発から参加して今年で三年。ついに販促推進計画を実行に移す段階となった。この販促計画ではインターネット、携帯サイト、ラジオCMなど、効果的にメディアミックスを導入。売り上げを伸ばす店頭キャンペーンも盛り込まれた。キャンペーンが実施さ

## 企業とのタイアップで『実学』を学ぶ!



る。また、学生たちはこうした経験からたくさんことを学び取ってほしいですね。共同プロジェクトに参加してくださった石原水産の大塚貴史さんがこう語るように、学生たちは、机上のシミレーションでは知ることのできない貴重な経験をこのプロジェクトから学んでいる。

と、「実学」の重要性を実感したようだ。また国際学部・国際ビジネス学科三年の三ツ島明香さんは「アイデアを出すのは大変ですが、自分たちの計画案が採用されると本当に嬉しいですね。そしてそれを実行できるなんて最高です」と、ビジネスの面白さに目覚めている。「学生の斬新なアイデアや元気のよさに、私たちも刺激を受けています。また、学生たちはこうした経験からたくさんことを学び取ってほしいですね。共同プロジェクトに参加してくださった石原水産の大塚貴史さんがこう語るように、学生たちは、机上のシミレーションでは知ることのできない貴重な経験をこのプロジェクトから学んでいる。」



↑カスミ水戸見川店の試験販売。  
→石原水産の大塚貴史さん(前列右から二番目)とゼミ生たち。

ホームページ  
<http://www.geocities.co.jp/Foodpia-Olive/4411>  
携帯サイト  
<http://ip.tosp.co.jp/i.asp?i=ogawazemi>

Circle Flash!

今回紹介するのは、学内でもかなり知名度の高いサークル『常盤プロデュース委員会』だ。

このサークルは、さまざまな企画運営を通して、学生同士のコミュニケーションを促進し、キャンパスの活性化を図るために活動している。

活動内容は、『さくらページ』の制作。これは毎年十一月頃から編集を始め、翌年四月に発行されている。自分たちで企画を立案し原稿を書くことはもちろん、スケジュール管理や学生アンケートの集計なども手がける本格的な作業だ。

しかし、『さくらページ』の制作だけが常盤プロデュース委員会の活動



キャンパスライフを楽しくアクティブにプロデュースします！



第13回  
常盤プロデュース委員会

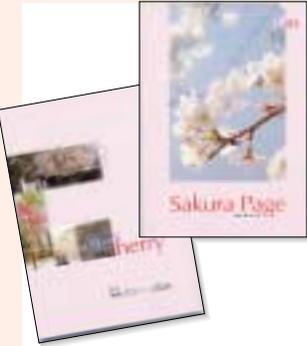


↑ときわ祭でのイベント企画も行う

ではない。新入生を対象としたサークル紹介。六月と十一月にはボウリング大会、さらに学園祭では自治会執行部との共同主催の特別講演会など、幅広い活動を展開している。

委員長を務めるコミュニティ振興学部・ヒューマンサービス学科三年の長沼友佳さんは「イベントなどの企画を終えた後の感動は大きいですね。また活動範囲が広いので友だちもたくさんできます。充実した学生生活を送るには、最適じゃないでしょうか」と、サークルの魅力を語っていた。また、元委員長の人間科学部組織管理学科四年の塩沢賢司さんは「イベントの運営などは責任も重く、本気でなくてはできませんが、いろんな経験ができるので、社会に出るから応用できるんじゃないかと思えます」と、スキルの向上につながる活動内容にも触れていた。

学生生活を楽しくしてくれる『常盤プロデュース委員会』に、これからも是非、注目していただきたい。



↑『さくらページ』の制作の様子

Campus Topics! \*

女子バレーボール部  
4部リーグ昇格!



Volleyball



←三部リーグ昇格を目指し練習するメンバーたち。  
↓(後列左から)海老原いづみさん、岩下晃子さん、真家喜子さん。  
(前列左から)中里美緒さん、高橋茜さん、太田まゆみさん。

絶妙のチームワークで勝ち続ける6人!



**本** 学的女子バレーボール部が関東女子バレーボールリーグで四部に昇格した。この昇格は春・秋通して六期連続の昇格で、まさに異例の快挙といえる。しかし部長を務める岩下さんは「入れ換え戦で楽に勝ったので、あまり実感はありませんでした」という。四部入れ換え戦は北里大学と対戦し、ストレート勝ち。つまり、とにかく強いチームなのだ。

だが、なんと部員数は六人。ひとりでも欠けたら試合には出場できない。「試合中にセッターが腕を打撲したこ

とがあって...」。セッターは海老原さん。痛みをたえてトスを上げ続けた。もちろん練習でも、絶対に怪我をすることはできない。だからという訳ではないが、練習は週三日、一日三時間程度と特別ハードなものではない。しかも、女子バレーボール部には監督もコーチもない。試合のときなどはベンチが寂しいという。では、強さの秘密はどこにあるのだろうか。「高校時代にバレー部に所属していたのは四人だけ。特にスター選手が集まっている訳でもありません。だから、攻守のバランスがいいこと、あとは全員、負けず嫌いだ」といふことじゃないでしょうか(笑)。確かにチームワークは素晴らしいものがある。試合も日替わりでヒロインが交代し、互いにフォローしあっているという。

現在の目標は七期連続昇格。つまり今年の秋の大会で三部リーグに昇格することだ。「でも私たちが卒業したら、残るのは二人だけ。それが心配です」。現在、絶好調で勝ち続ける女子バレーボール部。興味があったら是非、見学に来てほしいと岩下さんは語っていた。

とがあって...」。セッターは海老原さん。痛みをたえてトスを上げ続けた。もちろん練習でも、絶対に怪我をすることはできない。だからという訳ではないが、練習は週三日、一日三時間程度と特別ハードなものではない。しかも、女子バレーボール部には監督もコーチもない。試合のときなどはベンチが寂しいという。では、強さの秘密はどこにあるのだろうか。「高校時代にバレー部に所属していたのは四人だけ。特にスター選手が集まっている訳でもありません。だから、攻守のバランスがいいこと、あとは全員、負けず嫌いだ」といふことじゃないでしょうか(笑)。確かにチームワークは素晴らしいものがある。試合も日替わりでヒロインが交代し、互いにフォローしあっているという。

番外編

きらり人 KIRARIBITO

現地のダンサーに囲まれる芳賀さん



ウズベキスタンで民族舞踊を学ぶ!

★コミュニティ振興学部三年 芳賀 裕子 ダンスインストラクター

中央アジアには学ぶべき多くの技術があり、自分の踊りの中に取り入れるべきものがあると感じていた私は、ウズベキスタンでの民族舞踊研修に参加しました。

現地ではサマルカンドとブハラの二都市で研修。同じ国の民族舞踊ですが、地域によって背中の使い方や腕の動き、表現などに違いがあります。それぞれの技術を学び、作品として持ち帰ることができたのは大きな収穫です。

しかし、今回現地に行ってみて一番印象に残ったのは人々の日常でした。厚い壁でできた門の前を熱心に掃除し

ている人。道路沿いで遊ぶ子供たち。市場で働く人々...。ウズベキスタンの空気を、直に味わうことができたのがとてもいい経験となりました。

今回のウズベキスタン民族舞踊研修は、自分にとって本当に財産となる出来事。この経験を生かし、これから自分の踊りの興行を広げていきたいと思えます。



参加者約120名を集めた同窓会総会・懇談会

学生を応援しさらに発展する同窓会をアピール

Report

今

年から毎年開催されることになった、常盤大学同窓会総会・懇談会が、六月十四日、ホテルレイクビュー水戸で開催された。当日集まった同窓会員は、約百二十名。

議事に先駆けてステージに上った同窓会名誉会長の大畑哲学長は、大学、短大を取り巻く環境が厳しい今こそ、前進することが大切と語り、本学にオープンした「博物館学博物館」などの新しい取り組みを説明。本学のさらなる発展のためには、同窓生の協力が必要であると結んだ。

そして総会は議事へと進行。本年度事業計画案などが承認され、総会はスムーズに終了した。

同窓会会長の池田正則さんは「総会という硬いイメージがあるので、もっと気軽に集まっていたらいい会をセツトしよう」と検討中です。また、学生たちには、ちょっとピンと来ないかも知れませんが、いつも卒業した先輩たちが応援しているということ伝えていきたいなと思っています」と、今後の展望を語っていた。



同窓会会長 池田 正則さん

博物館学の『博物』という言葉には「ひろく物事に通じていること(広辞苑)」という意味がある。そして今回のお話しは、まさにその『博物』そのもの。さあ、植物分類学から自分探しまで幅広く展開する知の世界へ、キミもアプローチしてみよう！

コミュニティ振興学部 小山博滋教授に聞く 植物分類学と博物館学

「コミュニティを知るといって」世界へ広がる視野を養う

資料を資料とするために必要となる工夫

「昔から生物に興味があったわけですからね、動物だと解剖しなきゃならぬんですよ、動物を殺すことが苦痛で、やっぱりかわいそうでしょ」

小山先生の専門は植物分類学。特に花を咲かせて実を結ぶ『種子植物』の分類を専門に行っている。この分類とは「これまでつきりしていなかった種を、調査研究して、再定義し、名前を付けること。もちろん、そのためには膨大な資料が必要となる。」

「世界中、あちこちに行つて資料を



→ 小山先生が沖縄で採取した植物の標本。右：サケハコウソウナ、左：ヤクコウソウナ。

持ち帰り、調査しているわけですね。いつも言っているんですけど、我々は現場の職人です。地下足袋はいて泥だらけになって、歩き回っているのが本来の姿なんです(笑) 一度の現地調査で、約一トンのアルコール漬け標本を持ち帰ることもある。さらに、世界中の研究機関に収められている標本も、貴重な資料として使われている。 「新しい種の可能性がある植物を論文として発表する際には、資料としての標本がどの研究機関に収められているのかを必ずリストアップしています。そうすれば、私の説を外国の学者が検証するとき、わざわざ日本に来なくても標本を見ることが出来る。そのためにも、博物館が必要なんです。」

小山先生は以前、国立科学博物館植物研究部に在籍していた。ここには植物関係だけで、約三〇〇万点にもなる標本が収められている。資料をどのように管理すればいいのか、こうした研究も行ってきたのだ。 「現在は、多くの人が何らかの形でコレクションをしています。例えばミニカーとかフィギュアとか。それも四十から五十点程度のうちはいいんです。が、何千、何万点となると、工夫しなければしまった場所が分からなくなる。これが博物館学で言うキュレトリア



Profile  
こやま ひろしげ  
京都大学大学院理学研究科植物学専攻・博士課程修了。専門は種子植物の分類・地理学。●日本植物学会・日本植物分類学会・国際植物分類学会・沖縄生物学会会員。国立科学博物館植物研究部長を経て、平成十四年四月より現職。

自分の足元から植物を見つめていく

博物館はコレクションがあつてはじめて、博物館になりつる。小山先生の『ミュージアム資料論』では、特に自然史系の博物館の資料を、どう読んでいけばいいのかという話を、最初の一步として進められていく。 「自然史系の資料というとなかなかこえるかもしれませんが、自然という漠然としたものではなく、具体的にはそこで生活している種があるわけですよ。種は通常多数の個体から成り立っています。その個体を明瞭に識別しているのは人間社会だけで、他の生物の社会は基本的に種というまとまりで識別し、調べていくわけですね。この種はしばしば群れとして扱われる場合が多く、それをどう把握するのが重要なんです。いきなり種と見てもなかなか難しいから、まず個体、それから群

れを自分の身の回りにあるところから見てほしいと言っています。」 小山先生は『足元の植物を、まず見なさい』と言つて、いきなり全世界に目を向けようと言つても捉え所がない。はじめに世界ありきではなく、あるのはまず自分なのだ。自分たちのコミュニティを構成する生物相を調べ、徐々にその範囲を広げていく。 「生活している場所のもの、田んぼのあぜ道とか土手の草原とか、そういうものを繋いでいって地球になるわけです。だから、まず足元を見よう。」 このような取り組みを進めて行くと、もうひとつの大切な授業、『環境教育論』へと発展する。 「地球環境と生物は、密接に繋がっています。環境が変化すると生物も変化する。地質年代でみると、環境は大きく変化しています。その変化の中を生物は生き延びてきたのです。広い視野で環境の変化を捉えることが大切なんだと思います。自分の生活環境はどう安定しているのか、あるいは安定をどう変えたのか。また、それは自然に沿った変化なのか、無理に変えたのか、普段見過ごしていることを意識的に見ていけば、さまざまな問題が見つかる。環境にリアリティーを与え、考えていく取り組みなのだ。」

自分探しの旅はリアルな体験から始まる

「現在は、テレビや、コンピュータなどで見るバーチャルな世界によって、分かったつもりになっていることが多いような気がします。しかし、実際に自分の目で自然を見たら、分からないことがたくさんあるはずですよ。」

情報が氾濫する現代社会では、自分の考えなのか、他者の考えなのか判断がつかなくなる危険性がある。自分の目で見、肌で感じ、そして自分の頭で考える。こうした体験を繰り返すことで、『自分を発見すること』もできる。植物分類学、博物館学は、自分という存在をも確立させてくれる学問なのだ。

短 期大学・幼児教育保育学科で、赤ちゃんとそのお母さんが参加する授業が五月二十九日に行われた。この授業は乳児保育の授業として二年生対象に実施。学生が直接お母さんたちへ保育に関する質問をし、そのやりとりの中から実体験に基づいた幼児保育を学びとるといふもの。〇歳から一歳という、生まれたばかりの赤ちゃんをテーマに開かれ昨年に続き二度目。大きな音をたてないなど細やかな神経を配っての授業となった。



●赤ちゃんを熱心に見つめる学生たち。

赤ちゃんとお母さんが授業に参加

幼児教育保育学科



●授業は対話形式で進められた。

お母さんたちが学生の質問に答え、江波諄子教授が解説を加えるという双方向性を重視したスタイル。赤ちゃんと過ごす一日の流れや好きな遊び、また危険だと感じたことなど、テキストではフォローしきれない貴重なお話を伺った。 授業に参加した学生、長田久美さんは「八カ月から十カ月くらいの子は誰とでも遊ぶのに、一歳を超えた赤ちゃんは意外と戸惑つたりする。周りの環境に敏感になってくるんですね」と、赤ちゃんと接する方を体験的に学んだようだ。また、お母さんとして参加した中庭まきさんは「学生の皆さんがとても熱心で、もっといろんなお話をしたかったです」と、対話の重要性を話していた。

編集後記  
金砂大祭が始まったのは、八五年。それ以来、七十二年ごとに行われてきた壮大なイベントは、今年で十七回を迎えた。しかし、五百人を超える行列を仕切ることは大変な作業だ。現在でもそうだが、千年以上も前となると、その努力は並大抵ではなかっただろう。だからこそ、地域の連帯意識が芽生え

\*TOPOSに対する御意見は kouhou@tokiwa.ac.jp. までお寄せ下さい。  
\*古紙の利用・70%の再生紙を使用しています。